

Ⅱ 小児がんと診断されるまで



小児がんの症状は発熱、元気がない、腹痛などが多く、最初はかぜや便秘と言われることは珍しくありません。これらの症状が続くときや、口の粘膜からの出血や皮膚の出血斑、歩かない、手を使わないといった関節痛・骨痛、嘔吐を繰り返すことなどがあるときは、病院を受診しましょう。

小児がんが疑われるとき、病院ではさまざまな検査が行われます。検査は病名を決めるだけでなく、病気の進み具合や病気の性質を調べるためにも行います。このように正しく診断することによって、初めて、それぞれの子どもに合った過不足のない（最も効果があつて、最も副作用の少ない）治療を受けることができます。

骨髄検査・髄液検査

血液細胞は骨の中心部分にある骨髄で作られます。白血病や小児がんの一部では、この骨髄に病気があるので、腰の骨に針を刺し、細胞を採って調べます。また、脳や脊髄の周囲にある液体を髄液といいますが、脳腫瘍や白血病などでは、この髄液の中にもがん細胞が入り込むことがあります。椎骨という背中の骨と骨の間に針を刺し、髄液を採って調べる必要があります。

骨髄検査や髄液検査のときは、麻酔で痛くないようにします。検査にかかる時間は10～30分です。

生検せいけん

がんの組織の一部をとることを生検といいます。やはり麻酔をして、手術室か検査室で行います。生検された組織を顕微鏡で調べたり、特別な染色をしたりして病名を決めていきます。また、組織から遺伝子などを取り出して病気の性質を調べることもあります。生検をしてすぐに病名がわかる（迅速診断じんそくといいます）こともありませんが、通常は時間をかけて詳しく調べる必要があります、一〜二週間かかります。

画像検査

画像診断には、エコー（超音波）検査、CT、MRI、PET、シンチなどがあります。画像検査によって、病気になっていっている部分の大きさや位置だけでなく、性質がわかります。また画像診断によって手術の方法を決めたり、抗がん剤による治療の効果を判定したりします。多くの画像検査では、5分〜60分程度じっとしていかないといけないので、小さな子どもの場合は飲み薬か注射の薬で眠って行います。また、CTやMRIでは、造影剤ぞうえいざいといって腫瘍を見つけやすくする薬を撮影の前に注射することがあります。

マーカー検査

神経芽腫がしゅという病気では尿の中のVMAやHVAという物質の数値が、肝芽腫という病気では血液の中のAFPという物質の数値が高くなります。このような物質を一般にマーカーといい、

マーカーの異常から病名の見当がつく場合もあります。治療の効果があるかどうか、マーカーの数値の上がり下がりであるので、治療をしながら繰り返し検査をします。

いずれの検査も、検査の具体的な方法、意義、結果の解釈などについては、担当の先生やその他のスタッフとよく話しましょう。病気になって間もない頃は、考えないといけないことも多く、病気に関するいろいろなことを理解しにくく、最も大変な時期ですが、治療に向けてひとつひとつの検査をしっかりと受けていきましょう。

(岡本康裕)